
君は、かみさま

高遠 陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は、かみさま

【Nコード】

N2392Z

【作者名】

高遠 陽

【あらすじ】

勇者が神様との約束で魔物を退治し終えたとき、神様に「そばにいたい」と願いました。そして神様のもとに向かう勇者ですが、そこはこの世にはない白色の部屋の中でした。そこで勇者がみたものは……？

あまりR15っぽくはないと思いますが、念のために指定しました。そんなに長くないお話です。

だいいちわ

1 .

北の国と呼ばれる土地で、勇者は一人、魔物を退治していました。唯一絶対の神様が世界の理ことわりを自ら外し勇者を北の国に授けてから、ずっとずっと気が遠くなるほどの魔物を殺し続けてきました。そしてとうとう無限にわき出た魔物たちも、力尽きたのか最後の一体となつて、勇者の剣の前に敗れ去りました。その瞬間、勇者は天上からの光を一身に浴びて、天上から降り落ちる神様の声を受け止めました。

「勇者よ。そなたの犠牲、そなたの勇氣、そなたの力により、魔物はすべて退治された。……約束をいまこそ果たそう」

「ありがとうございます、神様」

「では、問おう。そなたの願いとは？」

「神様の御そばに。私はもう何も殺したくはありません。ですから、この身を神様の御そばに置いてください」

勇者の言葉が終る前に、天井から七色に輝く絨毯が勇者の前までのびてきました。

勇者はその絨毯に一步また一步と足を乗せ運び、遙かな天上まで疲れ果てた体を引きずるように登って行きました。

天上に近づくとつれ、世界は真っ白になって行きました。

唯一七色の絨毯だけが、道しるべとなりました。

七色の絨毯がぶつりとなくなるその先には、勇者の体の何倍も大きな真っ白い扉がありました。

勇者が扉の目の前にたどり着いたとたん、その扉は左右に音もなく広がって、眩しいまでの光が勇者の体を包み込みました。

「こんにちは」

光に慣れようと目を数回擦ると、ぼんやりと輪郭が浮かび上がり、そこに何かいるのがわかりました。

大きな部屋。

真っ白い壁、真っ白い天上、真っ白いカーテン。

すべてが真っ白で、けれど繊細なようであつても重厚な、子ども
の部屋。

その真ん中に人形のような女の子が一人、椅子に座つてまっすぐ
勇者を見ていました。

銀髪かと思うほどに真っ白な長い髪に、黒の斑点が強くうかがえる
銀色の瞳、そこだけ色がさしたような真っ赤な唇。着ているドレ
スはこれまた真っ白でたくさんの布を使ってドレープを作り、また
リボンもボタンも真っ白の、唇以外のすべてにおいてこの世にはあ
りえない白色で統一された、信じられないほど美しい女の子でした。
さきほどの声はこの女の子の唇から洩れたものようです。

戦うことを生きる目的としてきた勇者がはじめて戦うこと以外で
心を動かしました。

北の国では魔物を退治することで人々から敬われまた尊敬され、
そして愛を乞われましたが、勇者は人の感情がなくなるほど魔物を
倒してきたので、人を愛し愛されるということがわかりませんでし
た。

けれどたった一目、その白い少女を見たとき、心が、身体が、
少女を欲しいと叫び始めました。

勇者は恋に落ちたのです。

勇者は今、神様の御もとに行こうとしていました。

自分から願ひ出て、神様の御もとへといざなう道しるべを与えら

れました。

その道しるべの途中に、まさかこのような人としての至福がまっ
ていようとは思ってもみませんでした。もしかしたらこれは神様
が勇者に与えた最後の試練かもしれないとも思いました。

「こんにちは。こちらに神様はおいでですか？」

その言葉に女の子はふふっと笑って血管が浮き出るほどの白い両
手を勇者に差し出してこう言いました。

「私が神様です」

「……は？」

「私のドールハウスのお人形さん。私があなを創造した、あな
た方が言う『かみさま』です」

だいにわ

2 .

神様？

目の前の真つ白い少女が、神様だって？

「……………じょお……………だんっ」

「冗談ではありませんよ？私のお人形さん。さあ、こちらまで来てください」

まるでその言葉に吸い寄せられるように、勇者は『かみさま』と自ら名乗る白い少女のそばまでふらふらと赴きました。

けれどその思考の中は今までにないほどに回転しています。

そんなわけがない。

神様がこんな少女なはずはない。

神様はもつと厳かで厳肅で、すべてにおいて律しているはず。声も太く響くようなもので、この目の前のような少女の甘い声ではなかった。

それに……………それに、俺のことを『お人形さん』などとは、決して呼ばなかった！

「ふふ。やはり、驚いていますね」

「神様は別のところにいるのだろう？なぜ本当のことを教えてくれないんだ？」

目の前の少女は勇者のぞんざいな言葉を聞いてその美しい眉をひ

そめました、それでも思いなおしたのか勇者をまつすぐ見上げて、自分を抱き上げるように両手を勇者に差し出しました。

「抱いて？それがお人形さんの望みでしょう？」

「……は？」

さつきからこの少女が言うことに何一つまともなことがない。

今度は勇者が盛大に眉をひそめて少女をまじまじと見つめました。

「だつてお人形さんはいったでしょう？『神様のおそばに』って。だからこうやってここまでくることができたのだし。それに心が白くないものはあの七色の光の絨毯を渡つてこの部屋までやってくることはできないの。その時点でお人形さんは私のそばにすることが相応しいのだと『おとうさま』がお認めになられたから、この部屋にも入れたのでしようし、私の近くまで来ることができた。だから、抱いて？」

「……言っていることの意味が理解できない」

「あら。意外とお人形さんってお馬鹿なのかしら」

細い指を頬に当てて首をかしげるその様は本当に絵になるとしかいいようのないものだったが、赤い唇から紡ぎだされる言葉には少しとげがあるようでした。

そのとき、少女の四方を囲むようにあつた四角い箱のひとつが、かたんと音をたてました。

「ああ、北の国にまた魔物が生まれたのね」

箱を覗きこんだ少女は、とんでもないことを呟きました。

北の国といえば、勇者が魔物から守ろうと必死になって戦っていた、あの国のことです。

けれども目の前の箱が北の国のわけがありません。

「なにを、馬鹿なことを……！」

「誰に向かつてそんな言葉を言ってるの？いくらおとうさまが認めたお人形さんだからといっても許しませんよ？」

「お前の言うことのほうがどうかしてる。そんなちっばけな箱が『北の国』のわけがないだろう」

「お前……？今、私のことを『お前』といったのですか？」

「名も知らないのだから当然だろう？」

「ふふ。お人形さんの考えではそうなのでしょう。でも私は名乗りましたよ？『かみさま』だって」

少女はその細い手をすいと勇者に向けました。

その瞬間、勇者の体が持ち上がり、そのまま凄まじい轟音とともに壁に叩きつけられました。

「ぐほっ……」

勇者は何が起こったかわかりませんでした。

今まで戦ってきた相手は魔物ばかりで、こんなふうに腕ひとつ動かすだけでここまで勇者を追い込めるような存在ではなかったからです。

「躰がなっていないのは、致命的ですね。そんなお人形さんだっただなんて、残念です」

「……し……つけ、だと？」

「そうですね。人を指すときに『おまえ』だとか『あんた』だとか、そういう言葉を使うこと自体自分のほうが優位だと考えてい

る表れか、もしくは自分のおろかしさを隠そうとする単なる虚栄か
ですね。わたしのお人形さんはどちらでしょうね」

勇者はそんな風に考えたことありませんでした。

でも逆を言えば、この少女は明らかに自分が優位だという態度を
崩そうとはしていません。

「かみ…というのか」

「二度言いましたよ？三度目は、ありません」

にこりとほほ笑む顔に傲慢さはまったくありません。
ただ笑っている、それだけでした。

だいさんわ

3 .

壁に叩きつけられた背中がぎしぎしと音をたてて勇者の骨を伝って脳に直接響きました。

体が痛みで悲鳴を上げています。

けれども勇者は己の体よりも目の前の『かみさま』から視線と意識を外すことができませんでした。

勇者に子供のころの記憶などありませんでした。

一番初めの記憶すら、すでに魔物と戦っているときのそれでした。自分がどの出身で、親は誰かなどという、そういった当たり前のプロフィールが自分の記憶の中には何一つありません。

ただ、目の前の魔物を倒してこの国の民が魔物で傷つかないようになければという『思い』だけが心を占めていて、その『思い』に突き動かされて血に塗れる日々を送っていました。

その日は魔物ではなく、生きるための食糧になる動物を狩っていました。

痩せた土地、脂肪のない生き物。北の国は生きていくには非常に厳しい土地でした。

その上勇者は日々魔物を退治しているために田を耕すということができず、食糧は自分で狩った動物を干物にするなどして何とか喰いしのいでいる状態でした。

世界に勇者は一人しかいませんから、人が勇者に敬意を表して食

料を買いでくれようとしますが、勇者は断り続けます。

自分たちの明日すら厳しいこの土地で、食料を勇者に差し出してしまつては本末転倒、つまりなけなしの食料を勇者に差し出すことにより餓死をしたのでは魔物を倒して人々の生活を守っている意味がなくなつてしまつからです。

勇者は、自分ひとりの食いぶちなら自分でなんとかできました。

雪が降り積もる真つ白な世界で動物を見つけてそれを狩る。

そうして勇者は生きていたのです。

今日も真つ白い平原の遙か彼方に一匹の動物が辺りを警戒しながら移動しているのが見えました。

いた

キシキシと雪を踏みしめる音をたてることすらなく、勇者は獲物に近づきます。

獲物が弓の射程距離に入ると、弦をいっぱいまで引き、手を離しました。すると、とすと乾いた音が雪を伝って耳朵に響きました。

雪が赤く染まつていくのを確認しながら、勇者が獲物に近付くとどこからともなく光が集まり雪に反射して勇者の目を眩しさで曇らせました。

『勇者よ』

落ち着きのある太い声が勇者を包み込みました。

けれどその声の主の気配は、この白い平原のどこにも感じる事ができません。

勇者は慄きました。

勇者にとつて『気配』を感じることができないということが、いまだかつてなかったことだからです。

『勇者よ。そなたの勇氣、そなたの力によつて、魔物の数が激減した。けれどまだこれからも魔物が生まれ続けるであろう。無限に増え続けるであろう。けれど勇者よ。これまでどおりにその勇氣をもつて魔物を滅し続けることが可能であろうか』

深い慈愛に溢れた響く声は、勇者にとって初めての安らぎを与えてくれました。

それまでどんなに魔物を倒して民から喜ばれようと、勇者を讃えてくれようとも、勇者を心から受け入れてくれるものはいなかったのです。

北の国の人々とは異なる容姿。そして 魔物を倒すことができるその力。

どんなに素晴らしいと褒め讃えられても、民のその根底には畏怖が見え隠れするのです。

心の底では恐ろしい魔物すら倒すことのできる恐ろしい人だと思つているのが見えてしまうのです。

いくら国のため民のために魔物を倒すということを心に誓つているとしても、決して受け入れてもらえない自分という存在が、勇者を孤高の存在にしてしまつていました。

「あなたは……どなたですか」

声だけの存在に、勇者は目に涙を溜めながら問いかけます。

その問いに反応してか、勇者の回りがまるで春が訪れたようにじんわりと暖かくなりました。

『我はこの世界の管理者。この世界を安定へと導く道標』

「では、あなたさまこそ神様、なのですな」

『そうと呼ぶ者もいる』

「ああっ」

勇者は膝をついて見えない目で天を仰ぎました。

肌を切り裂くような冷たい空気はどこにもなく、温かなぬくもりのあるやさしい光が勇者を包み込みました。

『勇者よ。そなたの願いを叶えよう』

一段と暖かさをました光と神様の声が勇者の心を揺さぶりました。

だいよんわ

4・

知りうる限りの記憶の中で、こんな心が満たされたことはありませんでした。

神様の包容力を知った今、勇者は今も湧き上がる心の声のためと
いうよりも、神様のために魔物を倒し続けることを誓いました。

『勇者よ。願いを』

「神様。では恐れながらひとつ申しあげます」

頬に受ける光の熱が強さを増しました。

「今、何を願っているのかまったくもって思いつくことができませ
ん。ですので私がこの国に巣くう魔物をすべて退治したときに、も
う一度そのお言葉をいただけませんかでしょうか」

無謀な話だと思いました。

だってその申し出こそ、すでに「願い」になっているのですから。

『了承する。その時その場所で願いを聞こうぞ』

「ありがとうございます」

勇者は深々と頭を下げました。

無謀な申し出を神様が聞き届けてくださるとは、自分が言った言
葉なのに思ってもみなかったのです。

ふいに、突き刺すような冷たい風が、勇者の頬に当たりました。神様が勇者の前から立ち去ったのです。

瞬間、身体を引き裂かれるような痛みに襲われました。

実際の痛みではない、心の痛みです。

けれど勇者にとってその痛みは初めてのことであり、慣れない痛みに苦しみながらも戸惑うばかりでした。

しばらく経つと、見えなくなっていた目も

先ほどまでの強烈な光で目が瞑れていた勇者も、だんだんと落ちていて色彩が戻ってきました。

初めに飛び込んできたのは、さきほど仕留めたばかりの兎の赤い血。

今まで勇者が奪ってきた命の色でした。

無意識に兎の耳を掴むと、おもむろにその首を刎ねて血抜きをしました。

どくどくと流れ落ちる血を見ると、なにかも忘却の彼方へといざなっていくようでした。

けれど勇者は考えました。

自分が今何をしなければいけないか。

当面の食料を確保する。そして東のほうに現れたという魔物を倒しに向かう。

いつも通りの日々を過ごし、少しでも魔物がこの世界からいなくなる手助けをしなければと考えたたん、ふうわりと心が温かくなりました。

それは、神様の温もりです。

おもわず手を胸に当てて今得た温もりを確かめようとしたが、その温もりは一瞬で消え去り、喪失感に痛みがぶり返しました。

あの温もりを……

温もりを得るためには、神様を身近に感じなければならぬ。
神様を感じるためにはいったいどうしたらいいのか。

勇者はそのことばかりを考えるようになっていきました。

魔物と戦っているときには冷えた心が支配して、相手をいかに効率よく倒すかだけを考えて動き、とどめを刺していきました。

魔物の命のかけらが崩れ、すうとも息を吐かなくなったその瞬間、勇者は天から降り注いでくる神様の温もりを感じるようになりました。

それが勇者の思いを余計に積もらすことになっていったのです。

だいつわ

ざしゅっ

魔物の腹部に剣を入れた途端、魔物は血しぶきをあげながらゆっくりと後ろに倒れていきました。

はあっはあっはあっはあっ

勇者の耳には自分の苦しげな呼吸音と魔物の絶え絶えの息遣いが聞こえました。

仰向けに倒れたとはいえ、まだ魔物には命がありました。

勇者は感情もなく魔物に歩み寄り、両手で柄を握りしめたかと思うと、そのまま魔物の心臓のある位置に力を入れて振り落としました。

かはつと空気が器官から抜ける音が聞こえると、魔物の命の炎が薄れ消え去っていくのを勇者は冷めた気持ちで見続けました。

魔物が倒れた周りには、その魔物を長と仰ぐ小物の屍が数体、長に先だつてすでに冷たくなっておりました。

終わった

肩で息を整えながら、勇者は近くの大木の根元に腰をかけました。以前は国の民から魔物が現れたことを聞きつけては探し倒してきた勇者でしたが、この頃では魔物自ら小物を使い勇者を探し出し、あらゆる手を使って勇者を亡き者にしようとする躍起になっているように、魔物が勇者の前に押し寄せるようになりました。

魔物の浅知恵では勇者にはつけ込むべき弱みというものがないよ

うで、魔物たちは結局は己が暴力的な力を持ってしか勇者を亡き者にできないことを知りました。

そうなることとまるで魔物の総力戦のようになり、ひっきりなしに勇者の前に現れ、けれど勇者の力によって倒され続けていき、その屍を積み上げていくようになりました。

今日とて勇者が探し出すよりも前に小物が勇者の前に立ちふさがり、魔物の間で連携すらとることなく無防備に思慮もなく勇者に立ち向かってきました。

そして倒しても倒しても次々と現れる小物の魔物に辟易しつつ、体力をとられていくのに不安を感じたころ、小物たちの長であろう魔物が勇者の背後から襲いかかりました。

すえた臭いを放つ体臭とむかつく粘着質の音、そして何よりもその口内から吐き出る鼻がもげそうなほどの悪臭に、たとえ背後から襲いかかられたとしても勇者が気付かないはずはなく、振り向きざまに一撃、剣を振るうと、当たり所が悪かったのか赤色のの体液をまき散らしながら痛みを受けることもなくそのまま勇者に向かって強大な尾で勇者を巻き縛ろうしてきました。

とつさに尾を避けることができたものの、足をすくわれて倒れこんでしまった勇者に、魔物は容赦なく足で踏みつぶそうと踏み込んできましたが、そこは戦いなれた勇者のことです。くると体を回し、足を避けることに成功するとともに足首の裏に剣を一撃、腱を切り裂きました。

魔物の動きが、止まりました。

その好機を見逃すはずもなく、勇者は立ち上がりつつ魔物に向かい剣を振るいます。

ざしゅっ

血しぶきが勇者めがけて飛び散りました。

倒れゆく魔物に勇者は最後の 一撃を渾身の力を込めて打ち込みま

した。

だいろくわ

6 .

『ふ』

勇者の耳が、女の子の微かに安堵する声を拾いました。

魔物の死体が折り重なる場所に不似合いな、濁りのない透明な声。それとともに不思議な温かさが勇者を包みましたが、気のせいだったのでしょうか、すぐにその温かさは無くなり、代わりにとてつもなく大きな温もりが勇者を包み込みました。

『勇者よ』

それは勇者の唯一絶対である神様の声でした。

あまりの幸せに先ほど感じた声のことなど、勇者はすっかり忘れてしまいました。

神様はそれ以上の声を勇者に与えることはありませんでしたが、勇者にはその一言だけで至高の喜びを感じました。

神様

それだけで勇者は疲労を忘れ去りました。

心にほっかりと暖かい何かがまたひとつ根づきました。

俺はまだやれる

神様のために、俺は

体に力がみなぎってくるのがわかりました。
そうしてまた勇者は歩き始めるのです。

とうとう最後の魔物が目の前に現れました。

それがどうして最後の魔物だということがわかったのかなんて、
勇者にはわかりませんでした。

目の前の魔物の放つ瘴気がいまだかつてないほどの腐臭をはなっ
ていたからかもしれません。

無限にわき出る魔物のはずが、最近では個体数が減りつづけ、な
かなか見つけれなくなっていたからかもしれません。

それともいまだかつてないほどに強力で凶悪なその吐息と、濁っ
た瞳に映るすべての景色が禍々しく淀んでいたせいかもしれません。

勇者はその最後の魔物　魔王と対峙した時、いつものように

頭の中がすつつと透明になって行きました。

そして一点の光を見つけ出すと、その光を目掛けて突進し、剣を
鋭く突きさします。

けれど魔王の周りの瘴気が目と肺に入り込み、強烈な痛みが身体
を襲いました。

突き刺したはずの剣は位置を違えて致命傷とは成りえていません
でした。

ざわりと背筋に何かが這いあがって、勇者の喉元に巻きつきまし
た。

勇者の命を摘み取ろうと、瘴気が蛇の形をとって勇者の身体をは
いずり回ってきたのです。

人が焼ける臭いが勇者の鼻孔につきました。

それは腐臭の蛇がはいずり回った後に残された粘液が空気と反応

して熱を持つて勇者の身体を焼いているのです。

痛みは絶叫となって喉元から広がるはずでした。

ところが首に巻きついた腐臭の蛇が己が身体を使い、勇者を締めあげて声と息を塞ぎました。

勇者はこの好機を見逃しませんでした。

どんなに息を止めてもわずかながら入ってくる瘴気が、勇者の肺や皮膚を破壊していたのです。それが瘴気の蛇によって締めあげられた喉から肺にはいることがなくなったのですから。

瘴気の蛇の頭を掴みとるとその頭を剣で切り落とし、身体をはぎ取りました。そして剣に瘴気の蛇の頭から滴り落ちた体液をなすりつけると、悲鳴を上げ続けている己の身体を顧みることなく、魔王の光に向かって渾身の一撃を与えました。

魔王は勇者のあまりにも無残で浅はかな知恵をあざ笑うように腹を見せていましたので、光のありかまで一直線で勇者はたどり着き、そしてその腹の中に光る命に自身の瘴気の毒に侵された剣を受けたものですからひとたまりもありません。本来なら自分の瘴気などなるともないはずだったのに、瘴気の毒にあたることのない心臓にいきなり剣と瘴気の毒を食らったのです。

魔王は、自身の過大評価のために、命を落としました。

そしてその天上の光が勇者に降りてきたのです。

だいななわ

7 .

見たことのない装飾、全てが白で覆い尽くされた部屋、その中心に豪華な椅子に腰を掛ける真っ白い少女。

白い石の破片がぱらぱらと身体にあたりました。

それは吹き飛ばされた自分の身体で作った、壁のがれきの一部でした。

けれど背中にあたる感触は壊れた壁のそれではなく、つるつるとした表面のそれでした。

神様の部屋は、無残な姿を許さない。

ふと見ると、魔物の粘液と腐臭の蛇の体液で汚れた服も、本来の色を取り戻すどころかまるで新品のようにぱりっとしていました。

もちろん背中中の痛みもいつの間にか消えています。

「な……ぜ？」

勇者の呟きに、赤い唇を薄く引き上げた神様はこう言いました。

「なぜ？あなたは私のそばにいますのでしょ……う？私のそばにと願ったのでしょ……う？ともすれば、あなたは私と同じでなくてはいけません。私と同じ、この白い檻の中で永久の時をすごすのですから」

「……確かに俺は神様のそばにと願った。神様のそばにお仕えることで安らぎを得られると確信したからだ」

「それはあなたの見解です。私からしてみれば、あなたの願いは『私のそばに置く』ということと、付随して『何も殺したくはない』ということのみです。……安らぎを得たいというのであればそれは

そう願うのでしたね。言葉というのは最後まできちんと言わなければ誰にも伝わるものではありません」

呆気にとられて、勇者は神様を凝視しました。

確かに神様が言うように、自分の望みは『神様のそばに置いてほしい』ことでした。

魔物を倒した後の絶対的な幸福感を、神様のもとにしていることでの先ずつと味わえると信じていたのですから。

けれど目の前の少女のような神様は、言葉通り勇者を『神様のそばに置く』ことで神様と同じだけの力を授ける必要があると思ったようでした。

それは勇者にとって、不必要なものでした。

「俺は神様と同じ力など欲していない。神様のそばにただ置いてほしただけだ」

「あなたは私のそばにいない必要があるのでしょうか？私がかみさまです。以前のあなたのように『死』はありません。現在の状況以外のすべてのものを拒否し、修復します。ですからあなたは私と同じでなくてはそばにいないことができないのです」

「……魂があなたのもとに行くものだ」と

「それはあなたの見解だと言いました。私はあなたが魔王を倒したときに願った通り、この部屋に呼び寄せ、またあの七色の絨毯を渡ったという時点でああなたは私のお父様にも認められた存在となったのです。わたしと同じで何が不満ですか？」

「あなたは私が必要ないというのですか？」

驚くことに、神様の頬に一滴の涙がこぼれおちました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2392z/>

君は、かみさま

2012年1月4日11時48分発行